

皆さん、ゴールデンウィークはいかがお過ごしでしたか。

休みがたくさん取れた方、また逆に仕事で多忙だった方いろいろでしょう。確かなのは、一年中で錦秋とともに今が一番さわやかな過ごし易い時期だということですよ。

筆者は、連休前半はその前の四月二十四日(木)から一泊二日で沖縄県出張だったので二十六日の土曜日まで一日延ばして那覇市内などを散策してきました。

約十年振りの沖縄は那覇空港から市街地までモノレールができて便利になったこと、また首里城一帯がかなりきれいに整備されており、さすがに観光に力を入れている県だということを感じました。

買い物は国際通りの楽器店で、夏川りみ、川畑ア

キラ、ネーネーズそのほかにもよく一般に知られた沖縄民謡などの唄が満載されたCDを一枚。それに名物の市場で魚介類などが売ってある店々の見物でした。

長崎に戻つての休日には自宅で沖縄の青い海を思い出しながらこの音楽を聴いております。

それに名物の沖縄ソーキそばも食べてきました。が、若い時と異なり少し胃にどっかりした感がありました。それでも二泊三日の間に三回程食べまくりました。

さて、長崎北海道場では、去る四月二十七日(日)、二ヶ月に一回の恒例の道場内演武会を開催しました。

今回もあまり前もつての稽古時間のない中にもかかわらず十七組の演武をすることができました。

特に高校一年の副島、永

田両君はテスト明けだったためか、急に来たにもかかわらず幹事の古屋さんが指名したところ、さっと演武を披露してくれて、さすが若い会員は飲み込みが早いと感心しました。

また、小学二年生の中村祐太君は大人に混じっていっしょに参加してくれました。皆さんたいへんお疲れ様でした。次回は六月の下旬に行いますが、だんだん暑くもなりますし、体調管理に気をつけながらまた頑張ってください。

今月の二日(金)夜、浜口電停の西洋館内の「かがりや」で有志により大平さんの還暦祝賀会を開催しました。

九名の方が参加してくれて幹事の古屋さんから、あいにく仕事などの都合で来られなかった方々の気持ちも含めて記念の薄赤めのポロシャツを大平さんにプレゼントしまし

た。

大平さんは、合氣道を始めたのが平成十一年七月ですが既に三段の腕前で、北海道では幼年部の指導を中心にしている活躍しております。

生まれが昭和二十三年七月ということ、今年満六十歳ですが、本人を見ていると今の六十歳は本当に若いなあとという印象です。

しかし寄せる歳には誰でもやはり勝てません、あまり無理をしないようにしながらこれからの活躍を祈念しましょう。

また、今回の祝賀会には幼年部会員の吉田晃洋君のお父さんと幸治氏も出席してくれましたが、まだ四月初めの入会で稽古日数も日が浅い中をありがとうございます。古川さんも医療の公務の合間をぬって顔を出してくれました。

次回のこの手の祝賀会

は、十月にめでたく満二十歳になる既に社会人の桑原君の成人祝いの宴席を設けることが会場一致で合意されました。

その幹事をちょうど十月の道場内演武会の世話役をすることになっている村里さんが引き受けることが決まりました。

「さらば、友よ」前号で、筆者が学生時代の親友を三月下旬に病気で亡くしたことを記させてもらいましたが、享年はまだ盛りの五十七歳でした。

あらためて、遠く東北相馬の地に眠る信兄の御霊に哀悼の祈りをささげる日々ですが、人生は何でも理解し合える友達をどれくらい持つかということが、その人の一生の意義をたいへん左右してくる要素の一つではないでしょうか。

現代は人と人とのコミ

ユニケーションが薄い時代だと言われております、合気道を通じて単に技の日探求だけではなく、これらの重要性についても指導者はしっかり伝えていくことが使命の一つではないでしょうか。

寂然不動

以前この「岩屋通信」の編者をしていただき、現在は佐賀県内に在りされ、合気道は熊本城北道場に所属し、その傍ら佐賀大学の学生合気道部にも精力的に行かれながら居合道などにも精進されている衛藤健吾氏が、この岩屋通信の中でコラム的なものとして執筆されていたのが「飛爺水の独り言」という題名で、内容もたいへんウイットに富み、気軽に読めるものでした。

それには到底及ぶものではないのですが、その意思を引き継ぐには何か

まず題名をと、ここ暫く考えておりました。

ちょうどその時、これまでの合気道関係の書類を連休中ということもあつて少し時間にゆとりがあつたので整理しておりました。

いろいろと過去における本部での演武大会や懇親会時に砂泊先生を囲んでの記念の懇親会の席での楽しそうな集合写真や、演武のプログラムとかが出てきたりして、また道場が設立した当時の平成十四年頃の発足に至るまでの関係者のたいへんな記録とかも出てきて、あらためて月日の経つことの早さを痛感しました。

その中に、一枚の揮毫を撮影した写真がありました。このことばが題目の「寂然不動」なのです。これは、去る平成七年七

月九日に四十三歳の若さで亡くなられた長崎道場の故小田和信氏（七段）にたいへん縁のある言葉なのです。

というのは、小田氏は体調を崩す少し前まで、当時長崎道場の稽古がない日に勤め先だった三菱が所有する稲佐橋からすぐのところの三菱体育館に隣接する武道場で、合気道の稽古指導に熱心に励んでいたのです。

筆者も何度かその稽古に顔を出しておりましたが、いずれは小田さんが市内で独立した道場を立ち上げることになるのでは、という気はしておりました。

その三菱の武道場に掲載されていた額の揮毫がこれで、これを見た瞬間この四文字は武道をする者の心構えとしてこれ以上の言葉はないのではない

かと思ひ、早速写真に収めました。

よく見ると、この言葉の左下に書いてある文字から、三菱本社の社長として戦前に力を発揮し、今でも「小彌太さん」と親しみを込めて偲ばれることがあるといふ、創業者の岩崎彌太郎の甥になる岩崎小彌太氏の揮毫であることが解りました。

経営者としての岩崎元社長や、この揮毫に込めた同氏の経営者とまた別の顔である、熱い武道や諸芸全般に対する造詣の深さなどについては、宮川隆泰著「岩崎小彌太」 三菱を育てた経営理念（中公新書）を一読下さい。

いずれにしても、これから号毎の紙面のスペースを見ながらこの題名にふさわしいコラム（もちろん軽い小旅行的な記事等も時には）を載せていきたい

と思ひます。



道場内演武会（森脇二段と西脇五級の迫力ある自由技）



大平三段の還暦祝賀会（いつまでも元気で！）